

---

# 世界を越えし男と数の子たち

ココノエ・ヴァーミリオン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

世界を越えし男と数の子たち

### 【Nコード】

N8263Z

### 【作者名】

ココノエ・ヴァーミリオン

### 【あらすじ】

俺はこの日、掛け替えの無い奴らに出会った。

俺は車に跳ねられて死んだと思ったら、なんかよく分からんが別世界に行ってしまったみたいだ。

気が付けば、マッドな科学者や12人の姉妹と暮らしていたり、組織にケンカ売って犯罪者になっちゃったり。平凡な日々を送っていたり

そして――俺は戦う。ナンバーズ達を、世界を守るために。

## プロローグ（前書き）

ココノエです。

初投稿なのでうまく出来ているか分かりませんが、頑張っ  
て面白くものを書いて行こうと思います。

## プロローグ

夜の街を歩いている上下黒い服を着て赤いジャケットを着た男がいた。

秋の冷たい風が男に強く当たっている。

???「秋

とはいえ結構寒くなってきたな。」独りそう呟きながら、上着のポケットに手を入れた。

男がポケットから取り出したのは、赤い、宝石のような石だった。

???「あれからもう半年か…」

赤い石を見て、彼は半年前の事を思い出していた。

半年前、彼：五十嵐優斗の家族は、居眠り運転による信号無視の車との衝突事故で亡くしてしまっているのだった。

彼の持っている赤い石は、彼の妹の沙耶に貰った物だった。

ユウト「そういやあ、明日はサヤの誕生日だったな。墓参りに行かないと、父さんと母さんの分も何かお供え物でも持って行ってやるかな。」そう考えながら、青になった信号を渡った。信号の真ん中あたりで、同じ信号を渡っていた人達が自分の右側を見て何かを叫んでいる。

右側を見ると、大きいトラックが自分に向かって突っ込んで来ているのを見て思わず優斗は叫んだ。

ユウト「ちょ！マジかよオイ！」

トラックはもうすぐ目の前まで来ている。死ぬ、これは逃げようが無い。しかし、彼は不思議と落ち着いていた。

ユウト（ああ、もう死ぬからかな、時間がゆっくりに感じられる。サヤ、もうすぐ俺もそちに行くみたいだ。お前の誕生日、そちで祝ってやるよ。って、プレゼント買ってねーから何もあげられねえな、悪い。）

そうして彼は目を閉じた。

彼は気がついていなかった。上着のポケットの中の赤い石が強烈な光を放っていた事を。そして、その光は彼を飲み込み、彼は姿を消した。

車は、何にも当たる事無く通り過ぎた。後に残っていたのは、車が当たる直前、光に飲まれて消えた優斗の事で困惑している人達だけだった。

## プロローグ（後書き）

光に飲まれた彼はどうなったのか。次回はナンバーズ達との出会い。

ユウト「異世界トリップとか、とんでもない事になってるな、

俺。」

出会いはいつも突然っていうけどこれは特殊過ぎる(前書き)

今回、ナンバーズとマッドな科学者と出会います。

出会いはいつも突然っていうけどこれは特殊過ぎる

ユウト「あれ？生きてる……」優斗は呆然と突っ立っていた。自分は車に衝突したはず。それなのに体には何ひとつ怪我も無く、車に衝突したときに襲ってくる強烈な痛みも無い。

優斗が目を開けた先に映ったのは、五体満足の体と、どこかの建物の中であろうか、見知らぬ通路だった。

ユウト（どこだ？此処。天国って訳じゃ無さそうだが）

優斗は上着のポケットに手を入れ、赤い石を取り出した。

ユウト（これが無事って事は、車に轢かれてはいないって事か。轢かれていたら、これも粉々になっているだろうからな）

それにしても、何故自分は無事なのか、ここはいつたいどこなのか疑問は尽きる事はなかった。

ユウト「ここに突っ立っていても仕方ない。とりあえず、この建物の外に出てみるか」

優斗は、見知らぬ通路を歩き始めた。

ユウト「そういえばこの建物、誰か人が居たりするのか？もし居たら俺、侵入者だとか言われたりするのかな？」

冗談半分でそう呟いた。その時、警報のような激しい音が突然鳴りだした。

ユウト「な、なんだあ！？」

警報の音に驚く優斗。

ユウト「これ……俺のせいか？だとするとまずいよなあ……」

そう言つと優斗は走り出した。この警報の原因が自分なら、捕まった後、警察にでも突き出されて逮捕、という事になるかもしれない。

持っていた疑問を後回しにして、優斗は通路を駆け抜けた。



ユウト「ったく、出口は何処だよ」

独りそう言っと、優斗は通路の壁に寄りかかった。

すると、左腕が何かにいきなり掴まれた感じがした。

左腕の方を見るとそこには、信じられない事が起きていた。なんと、壁の中から一人の女の子が現れたのだ。

???「つつかまゝえた」

可愛らしい声と共に、優斗の体を拘束した。

普段なら女の子と密着すれば、男としては少しは興奮したり恥ずかしいと思ったりするだろうが、今の優斗にはそれどころではなかった。

???「セイン！侵入者は捕まえたか！」

走って来た通路の奥の方から別の女の子……ではなく女性がやって来た。

セイン「うん、捕まえたよトーレ姉」

セインという名の女の子が、通路から来た女性――トーレにそう答えた。

そして、トーレは優斗の所に来て、質問して来た。

トーレ「貴様……何者だ？管理局の魔導師か？」

ユウト「何者だあ？相手が何者か尋ねるときはまず自分からじやねーのか？それに、管理局とか魔導師って何だよ？」

それもそうか、と言うようにトーレは名乗った。

トーレ「私はN.O.3、トーレだ。お前の名は何だ？何故、ここに侵入した？（管理局を知らない？この男はいつたい……）」

ユウト「ああ、俺の名は優斗、五十嵐優斗だ。ここには、気が付いたらいたって感じたな。つか、ここ何処だよ。」

あのやり取りの後、俺はトーレとセインにとある一室に案内……と言いか連れて行かれた。トーレに「持っているものを全て渡せ」と言われたので、持っているもの……携帯と財布、あと赤い石を渡し

た。赤い石を見たトーレが何か呟いたようだがよく聞こえなかった。トーレが部屋から出て行った後、今の状況を整理していると、扉の開く音と共に、二人の人が入って来た。

片方は紫色の髪に白い白衣を着た男、もう一人は薄い紫っぽい色の髪をした女性だ。

???「すまない、待たせてしまったね。私の名はジェイル・スカリエッティ、隣に居るのはウーノ、私の秘書だ」

ウーノ「はじめまして、ウーノです」

ユウト「あ、五十嵐優斗です。」

挨拶を交わした後スカリエッティは、赤い石を取り出して言った。

スカリエッティ「君の持ち物を調べさせてもらったよ」

ユウト「それは、さっきトーレに渡した石」

スカリエッティ「これは、時空移動型のロストロギアのような。」

時空移動は映画とかで有ったから何となく分かるが、ロストロギアっていうのは知らないな。

ユウト「なあ、その…ロストロギアっていうのはどういう物なんだ？時空移動ってのは何となく分かるけど」

スカリエッティからロストロギアについて聞いた。何でも、世界は一つだけでなく、星の数程あるらしい。そしてロストロギアとは、進化し過ぎた世界の危険な技術の遺産なんだとか。しかも、物によつては世界を滅ぼす程の力を持った物や、俺の持っていたような時空移動型の物もあるんだとか。

ユウト（何でそんなものが俺の居た世界にあったんだ？）

スカリエッティ「さて、これらの事から君は次元漂流者……世界規模の迷子になってしまった訳だが……」

ユウト「ま、迷子……、って、まだ何かあるのか？」

スカリエッティが優斗の目を見ながら言う。

スカリエッティ「ああ、このロストログアの魔力が切れていたからね、魔力を注入してみたが、全く反応しなかった」

ユウト「つまり、もうそれは使えない…そう言う事か？」

優斗は嫌な予感を覚えつつ、尋ねてみた。

スカリエッティ「そうだ。この石での時空移動は出来ない。仮に出来たとしても、元いた世界に帰れる可能性はゼロに等しい」

……ここまで言われたら誰でも分かる。

スカリエッティ「…君はもう、元の世界には帰れないという事だ」

出会いはいつも突然っていうけどこれは特殊過ぎる（後書き）

さて、これから優斗はどうなるのか！？ 次回、スカリエツティが優斗に言った提案とは？そして、まだ見ぬナンバーズとの邂逅。ユウト「改めて見ると、ナンバーズ達のあの格好…なんつつか…エロくねえ？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8263z/>

---

世界を越えし男と数の子たち

2011年12月26日20時53分発行